

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和7年度学校評価 中間評価

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

学校名	伊万里市立大川内小学校	
1 前年度 評価結果の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・学力向上や心の教育において高い評価をいただいた。話し合い活動による授業の活性化、モジュール学習による基礎基本の積み重ねなどを大切に、今後も継続させ、児童に力をつけさせなければならない。 ・ふるさと学習においては、学校を支えてくださる地域の方々への感謝の気持ちを児童だけでなく、教職員・保護者もち、学校、家庭、地域で児童を育てている良さを今後も継続させていかなければならない。 ・これまで同様にいじめの未然防止、早期発見、早期解決に複数で取り組んでいく必要がある。また、情報モラルについては、児童に指導を行うだけでなく、育友会と連携し、保護者の方々にも危機意識を持ってもらえるような取り組みを行わなければならない。 ・働き方改革の観点から、職員一人一人に超過勤務を削減する必要性の意識付けはできてきたが、その実現に向けた具体的な取り組み方の工夫を考える必要がある。 	
2 学校教育目標	「笑顔で元気な大川内っ子」の育成 ～3つの笑顔で～	
3 本年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・大運動会や田んぼの学校などを中心に、地域の協力を受けながら、地域の「人・もの・こと」と連携した教育活動を展開し、地域のよさを誇りに思い、成長していくことに喜びを感じる児童を育成する。 ・すべての児童が、基礎的・基本的な知識及び技能を習得することを意識した学習活動を展開する。また、家庭や地域との連携を図りながら児童の学習面や生活面の様子をしっかりと見取り、複数で対応していく。 ・いじめの未然防止、早期発見、早期解決、再発防止を必ず複数体制で臨む。また、情報モラルに対する危機意識を学校だけでなく、保護者、地域を巻き込んで高める。 	

4 重点取組内容・成果指標

5 最終評価

(1)共通評価項目

評価項目	重点取組 取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	最終評価		学校関係者評価		
				達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	○基礎的・基本的な知識及び技能の習得 ○自分の考えをもち、考えをげたり深めたりするための対話を取り入れた学びあひ活動の充実	○全国及び県の調査やPRT検査で、全国、県の平均値を上回ることを目指す。 ○対話を取り入れた学びあひ活動を校内研究の中心に位置づけ、取り組んでいく。	・校内研究教科の体育科を中心に児童が自らの考えをもち、仲間との対話で学びを進化させる授業を意識し、取り組み、他教科でも取り組む。 ・モジュール学習に確実に取り組み、基礎的・基本的な知識及び技能を身につける。	B	・中間評価以降、モジュール学習の充実を図ったところ、文章読解力の向上が見られた。 ・主に体育の学習で、児童一人一人が目的をもち、課題解決のために友達と協働して取り組もうとする学び方が身に付いてきている。他教科でのこの学び方を浸透させていかなければならない。	A	・学校運営協議会で授業を参観した際、子どもたちが楽しそうに、そして和気あいあいと授業を受けていた。学び合っている姿が良かった。 ・少ない人数なので良い雰囲気でもとまりやすいし、個に応じたまなびができていと思う。 ・体育の授業を参観したが、いろんな場があってよいと思った。	
	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○85%以上の児童が、交流中、交流後にもつ感想において、誰とも交流した相手に対し、思いやりのある気持ちや相手を敬う気持ちなどを表現することができている。	・異学年交流である縦割り活動や伊万里特別支援学校との交流などを行う中で、相手を思う、思いやりや敬いの気持ちを育む。	A	・縦割り班活動はもちろん、様々な場面で上級生が下級生に優しく声をかけた手伝ったりする姿を見ることができた。 ・90%以上の児童が、交流した相手に対し、思いやりのある気持ちや相手を敬う気持ちなどを表現することができている。	A	・縦割り班の活動などで、児童みんなが他の児童のことを知っていることが良い。 ・サマースクールでは、気持ちが落ち着かない子を面談するなど、上級生が下級生に着か声をかけ、お話をしっかりとっている。	
●心の教育	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめの未然防止、早期発見、早期解決、再発防止に努める。 ○「学校が楽しい」と回答する児童の割合が90%以上を目指す。	・1月1回の「心のお天気アンケート」や年2回の「いじめ・教師の指導アンケート」、そして普段の関りから、児童の学習、生活、友人関係等における悩みなどの把握に努める。 ・アンケート実施後、気になる児童についてはすぐに対応し、職員連絡会などで情報共有する。 ・家庭との連携を図るうえで、SCやSSWを効果的に活用していく。	A	・「学校が楽しい」と回答した児童の割合は、93%と、アンケートを実施し、早期発見・早期解決に努めた成果があると言える。 ・学校全体やSC・SSWで随時情報共有を行い、日々の児童の様子に気づけることができ、専門家からも具体的なアドバイスを得ることができた。	A	・93%はとても良い、さらに学校が、楽しいと回答していない7%の児童もきちんと気づけていることが良い。 ・行きづらそうにしている子を地域の力を活かして何とかできないか考えている。	
	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒90%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」と肯定的な回答をした児童生徒80%以上	・係活動や委員会活動などの学校における活動全般において、意欲的に児童が活躍する場を設定し、承認される場を設ける。 ・学級指導や道徳を中心に児童の実態に合わせた職員は、必ず褒めるよう共通理解する。 ・キャリアサポートを活用し、各学期のめあて、教科や行事、体験活動と関連付けて作業を行う。	A	・90%の児童が、「先生はあなたのよいところを分かってくれている」と回答している。各担任はもともとこのことを職員が持っている児童を称賛したことが、この結果につながったと考えられる。 ・89%の児童が「将来の夢や目標をもっている」と回答している。各学級で各学期や行事等で目標を立てさせて取り組ませることで、目標を達成できたと考えられる。	A	・このような高い評価になったのは、日頃の生活の中で先生たちが、子供たちのことをよく見てくれているからだと思う。 ・「見てもらっている」と子どもたちが思うこともとても良い。だめなときはしっかりと指導をし、そのこともきちんと見てもらっていると感じてくれるような関係であってほしい。	
	○明るいあいさつと返事、そしてあたためる言葉をついで交流する児童の育成	○「明るいあいさつ」「元気な返事」ができている割合が、児童本人だけでなく、地域や保護者も80%以上とする。 ○「言葉づかいに気づける」と回答する児童が80%以上、地域や保護者の割合を70%以上とする。	○「明るいあいさつ」「元気な返事」ができている割合が、児童本人だけでなく、地域や保護者も80%以上とする。 ○「言葉づかいに気づける」と回答する児童が80%以上、地域や保護者の割合を70%以上とする。	・場に応じた言葉づかいやあいさつ、返事ができるように全職員が共通認識のもと、日常的に指導する。 ・学級指導や道徳を中心に児童の実態に合わせて指導し、自分の生活に目を向けさせ、意識の向上を図る。	A	・「明るいあいさつ」「元気な返事」への意識は高くなく、一方で保護者や地域は80%程度と児童の意識との差を縮めたい。今後は、家庭をもっと巻き込んで挨拶の向上に努めたい。 ・言葉遣いは、学級指導や道徳などを通して今後も温かい言葉遣いへの意識を高めていきたい。	A	・子供たちは元気で、あいさつだけでなく、手を振って応える子もいる。 ・家庭でも大人が率先して元気なあいさつをもっとしていくようにならなければならない。
	●望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	●健康に良い食事をしている児童80%以上	・栄養教諭と連携し、低中学年を中心に食育の授業を実施する。 ・保健だより等で年間を通して食育を通じた健康づくりを呼びかける。 ・朝食喫食率を95%以上を目指す。	A	・97%の児童が、朝ごはんを毎日、だいたい毎日食べていると回答した。家庭に呼びかけ、家庭の協力があつたからである。 ・年間を通して、おたより等で食育を通じた健康づくりの呼びかけの活動や、毎日の学校での給食指導や食育により、食の大切さ・マナーなどを学ぶことができていると感じる。	A	・ほとんどの子ができていることはとても良い。 ・学校で、保健便りなどのお便りに呼びかけてもらっていることもよい結果につながっていると思う。 ・高学年の子供たちは、親が用意できなくても自分で用意できるようになることも必要なのではないかと思う。	
●健康・体づくり	○望ましい生活習慣の形成	○中学校のテスト期間に合わせて、「SNSを利用した動画視聴削減週間」を設け、守ることができた児童が80%以上 ○アンケートで「外で運動したい」と回答する児童が95%以上	・便利だけでなく、スマートフォンなど情報機器の長時間使用等が心身へ及ぼす影響について指導する。削減週間を受け、アンケート調査を行う。 ・なかよしタイム(縦割り活動)や体育科の授業で運動に親しませ、体力の向上を図る。	B	・ノーメディア週間では、前回と比べて取り組み率が約63%と前回調査よりわずかに上昇した。心身の健全な成長のために、今後も引き続き児童や家庭に呼びかけを行っていかねばならない。 ・ジョギングタイムやドッジボール大会、長縄大会など学校全体で運動に取り組む機会を設けたことで日常生活の中で積極的に外に出て、運動しようとする児童が増えた。	B	・ノーメディア週間を充実させることで、できるだけスマートフォンに触れない時間を設定することが大切なことであると感じた。 ・スマートフォンを持ってはいけないという時代ではないので、上手な使い方、適正な使い方をこれからも教えてほしい。 ・外で遊ぶことは良いことなので、その楽しさをもっと味わってほしい。	
	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ●年間20日の年次休暇のうち、職員1人当たりの年次休暇の取得日数14日以上	・金曜日を定時退勤日とし、定時退勤を推奨する。 ・平日は19時を目安、また、月45時間以上の超過勤務が生じないように呼びかける。 ・長期休業期間を中心に年次休暇の取得を呼びかける。	B	・超過勤務者0人を継続している。目安を設けたことが要因であると考えられる。また、昨年度以上に年次取得率が向上した。 ・年次休暇14日以上取得者が、過半数を超えた。声かけ等が功を奏したと考えている。	B	・年休など休みをとることが増えたことは良いことである。 ・年度当初よりもよくなっているようすが、朝早くから夜まで電気がついている時があるのが気になる。	
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	○会議、事務の効率化	○会議の超過時間「0」を目指す。 ○会議資料や授業の教材等、校務サーバー内に置き、供覧することで効率化を図る。	・資料の事前配布、事前に読んでおくことの徹底、会議開始、終了時刻厳守の継続。 ・校務分掌や授業の教材等を校務サーバーに保存し、有効活用する。	A	・会議は勤務時間を超過していない。資料の事前配布、サーバーの活用等が効果的であった。 ・勤務管理システムを本格的導入し、年休申請など効率化を図ることができた。	A	・今年から導入されたとのことですが、このような取組はとても良いことであると思うので、今後もより良い方法等を活かしてほしい。	
	●特別支援教育の充実	○特別な配慮を要する児童に対する個別の支援計画、指導計画に基づいた支援	○職員会議や職員研修等で、特別な配慮を要する児童について共通理解を図るとともに、専門家の指導を通して理解を深める。	・特別な配慮を要する児童をリストアップし、丁寧な見取りを行う。 ・夏季休業中に専門家を招聘しての研修を行い、個別の支援計画、指導計画について見直しを行う。 ・児童の現状を保護者と共有し、望ましいと考えられる就学について考える。	A	・特別な配慮を要する児童への職員間の共有、必要に応じた個別支援ができた。ケースによっては専門機関と連携し支援について検討することができた。 ・通常学級でできる発達障害をもつ児童の支援について研修を行った。	A	・学校運営協議会で参観したときは、特別な配慮が必要であると感じにくいみんな授業に臨んでいた。日頃の関係作りなど先生方が努力されていると感じることができた。

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目

評価項目	重点取組 取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
				達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言
○ふるさと学習の充実	○地域の「人・もの・こと」とふれあひ、そのよさを感じ、地域を大事にする心を育む教育	○地域の「人・もの・こと」に愛着を持ち、大切にしていきたいと感じる児童を90%以上にする。	・田んぼの学校、各学年の祭典に応じたふるさと学習、見守り隊の方のふれあひ等のよさに気づかせる。また、感謝の会を通して地域の方々への感謝の気持ちを育む。 ・コミュニティスクールを活用し、学校と地域が一体となった活動等に取り組む。郷土への誇りを培う。	A	・地域の「人・もの・こと」に愛着をもち、大切にしていきたいと感じる児童が94%、学校の取り組みを評価している保護者が91%となった。地域とのかかわりの大切さを実感していると考えられる。 ・児童の日記などから地域行事に参加している。このようなつながりを今後も大切にしていこう担任からだけでなく、全職員で声をかけていく。	A	・「ありがとう感謝の会(地域の方がへ感謝を表す場)」に参加したとき、子供たちの発表がとてもよく、地域のことを大事に思うことが伝わってきた。 ・地域とのつながりを生かした取組は、大川内小の良いところだと思つので、今後も続けてほしい。 ・地区の行事には多くの子供たちがやってくるので、ほほえましい。
	○交通安全等の指導 ○情報モラルの指導	○交通安全に気を付けていると思う児童「危険から身を守る能力が身に付いている」と思う保護者を80%以上にする。 ○情報モラルについて、十分に理解できている児童を90%以上にする。	・地域の見守り隊の協力も得ながら、交通ルールについての声かけを常日頃行う。 ・交通安全教室、集団下校において、繰り返し、交通安全についての話を行う。 ・アンケートを実施し、児童のインターネット機器や環境についての実態を把握する。また、保護者と児童向けに情報モラル教室を行う。	B	・見守り隊の方が毎朝見守っていただき、児童の99%、そして保護者の94%が安全な登校ができていると感じている。また危険なことには、聞き取り、全校に指導することができた。一方で、防犯ブザー一所有の意識が73%と低いため、定期的に確認するなど、意識を高める必要がある。 ・情報モラルに関するプリントを配布したり、終業式などには危険性も伝えることができた。	B	・事故が起きていない。そのため、子供たちは安全に登校することができていると思っている。 ・スマートフォン等の情報機器を持つのが当たり前になってきていると感じている。こんなときだから、使い方を学ばなければならない。 ・これからも情報機器の使い方を指導していくことは、課題になってくると思われる。

●…県共通 ○…学校独自 ●…志と誇りを高める教育

5 総合評価・ 次年度への展望	<ul style="list-style-type: none"> ・学校運営協議会による授業参観等を通じて、学力向上、学び合いなど高い評価をいただいた。モジュール学習等での基礎学力の定着、現在取り組んでいる体育科の研究を中心に他教科への広がりや次年度、重点的に取り組んでいきたい。 ・地域の「人・もの・こと」とふれあひ、そのよさを感じる児童が増え、こちらも高い評価をいただいた。これまで同様、感謝の気持ちをもち続け、地域とのつながりを大切にしていかなければならない。 ・毎年のように「情報モラル教育」を課題としている。これは学校はもちろん、地域の方々も課題と思われている。育友会との連携を維持し、各家庭の危機意識を高めていかなければならない。
--------------------	--